

学びのたより

東海国語教育を学ぶ会

2019年1月12日

文責：JUN

子どもの育ちにかかわる教師という仕事の喜び

1 私は憧れて教師になった

私は、教師という職業を私自身の意志で選んだ。私の父は生まれて百日で出兵し戦死した。その父は自営業だった。母がその家業を引き継いで小さな商店を祖父とともに営んでいくのだが、そんな私の家族に学校の教師という雰囲気はまるでなかった。にもかかわらず、私は、小学校6年生には「学校の先生になる」と決めていた。私は、その一本道を、75歳になる今日まで歩んできたことになる。

人が自分の進むべき道を選択するとき、そこに必ず、強い影響を与えてくれる人物の存在がある。私の場合、それは、当然、家族ではない。その人物は、読んでくださっている皆さんにとってはやや意外な人だろうと思う。

その人とは、私の学校の校長先生である。担任教師ならまだしも何百人もの児童のいる学校において校長は子どもにとって遠い存在である。けれども、私の場合は、特別な事情があった。

前述したように私には父がいなかった。校長先生の家が私の家に近かったこともあり、先生はいつも私のことを心にかけてくださっていた。

ある日、私の家から学校までは徒歩で30分くらいかかるのだが、その道を母の自転車に乗せてもらって登校したことがあった。朝から気分が悪く登校を渋りそれでやむを得ず母が私を学校まで送ることになったのであった。すると、後ろから1台の自転車が私たちを追い越していった。そのとき、その自転車から声がかかった、「順ちゃん、遅くなっても学校休まないでえらいぞ!」と。校長先生だった。私に声をかけてくださったのはこの時だけではなかったが、この時のことは、65年以上前のことなのにはっきり覚えている。

何年生だったか忘れたが、写生大会で私の絵が賞をとったことがあった。それだけならそれだけのことなのだが、その絵がもう一人の子どもの絵とともに校長室に飾られたのだ。父親がいないこともあり、自分に自信がなくやや内に閉じこもりがちな私にとって、これほどうれしいことはなかった。めったに入ることのない校長室に招かれた時の校長先生がどれほどやさしく思えたか、いまでも忘れられない。

もう一つ強烈な思い出がある。6年生のとき、私の地区の神社で子どものための「山の神」というお祭りのようなことをすることになった。すると、地区の子どもたちから、「お祭りなんだから、自分たちの地区の子は早く帰れるようにしてもらおう」という声が出た。そして、どういういきさつだったか忘れたが、私が校長先生に申し入れることになった。私の話を聞き終わった後、校長先生が話された言葉は今もって記憶に残っている。

「順ちゃん、もっとよく考えやなあかん。この小学校にはいくつもの地区がある。それなのに、順ちゃんの地区だけ早く下校したらどんなことになるか、ちょっと考えたらわかるはずや。それが順

ちゃんにわからんはずがない。」

私が顔から火の出るような思いになって校長室を後にしたのは言うまでもなかった。けれども、この出来事が、校長先生に対する私の信頼心を確かなものにしたと言っている。私が教師になりたいと思うようになったのは、ここに記したようないくつもの出来事の積み重なりだけれど、とりわけ、お叱りを受けたこの出来事が大きかったと言える。私は、叱られたのだけれど、「順ちゃんにわからんはずがない」という一言がうれしくてならなかったのだった。父親がなく、内向的で友だちともうまく接することのできない私にとって、家が近くで、いつも心にかけてくださっている校長先生がいてくださることはどれだけありがたいことだったかと思う。その校長先生は、私が入学して卒業するまでの6年間ずっと学校にいてくださった。後からわかったことだが、校長在職はその当時でもめずらしい10年に及んだとのことだった。

校長先生が私にしてくださったことはこれだけではない。ここに記したのはその一部である。それだけに、私のような子どものことをこのように見守り、子どもの心に希望を抱かせる「学校の教師」という仕事に強い魅力を感じたのだ。当時の私には、だから自分は教師になると言えるほどの自覚はなかつたろう。いつの間にか、そういう希望を口にするようになったということだと思う。けれども、今になって思い返すと、この校長先生の存在が大きかったと明確に言える。

2 教員のなり手が減少

私が、今、なぜこのような昔話を持ち出したかということについては理由がある。つい先日、テレビで、教育学部で教員免許状を獲得したにもかかわらず教職を希望しない学生が増えている、教師のなり手がどんどん減っているというニュースを聴いたからである。それは、大学に入る頃は教師志望だったけれど卒業までの4年間でその希望が失われたことを表している。つまり教師という職業に魅力を感じなくなったということだろう。

一方、今、学校では、教員不足という実態を抱えている。それは、目の前の学校運営を困難にするだけに、現場の教師たちにとっては教職を希望しない学生の増加以上に深刻なことになりつつある。臨時採用教員に頼らざるを得ない学校運営、それにしても臨時採用教員のなり手が少ない、おまけに早期退職者の増加、教員不足の直接的な原因はそういうことなのだが、教職を希望しない学生の問題と合わせて、なぜそういうことになってしまったのかと考えざるを得ない。

その原因の一つに、教師の仕事はつらい、大変だという印象の広がりがあると言われている。テレビ・新聞・ネットから流れてくる情報が、そういう印象を与えているからである。不登校児童生徒数やいじめ発生件数の増加、学級崩壊の小学校低学年への広がり、心的疾患に陥る教員の増加が言われる一方、学力低下問題への対応が過度に強調され、そして起きてはいけないことだけれど教員の不祥事が大きく報道されるなど、今や、教員に向けられる視線は厳しさを増している。そういう情勢が教師になろうという気持ちを萎えさせているそれが原因の一つだというわけである。

しかし、それが原因で教師のなり手が減っているとしたら、教師をしてきた私たちも責任の一端を感じざるを得ない。そういう情勢を吹き飛ばすほどの教師であることの魅力を、子どもたちに見せられなかったと思うからである。

どんな仕事だって楽ものはないのである。だから、古来、人は、楽かどうかだけで仕事を選択してきたのではなかったのではないだろうか。もっとも必要なものは、モチベーション、つまり「やりがい」があるかどうかなのだとと言える。ということは、今、教員のなり手が減少しているということは、

そのやりがい薄くなっているということになる。つまり、今後、教員になりたいという人を増やすために必要なことは、そのやりがいを生み出すことだと言ってよいのではないだろうか。だから、「教師の仕事ってなんてやりがいのある仕事なんだろう」と子どもたちが感じるような働きを教師である私たちがしなければならなかったと思うのだ。

もちろん、教師の仕事に悪しき影響を及ぼす情勢がそのままよいということではない。未来を担う子どもの教育には国民全体の理解と支えが必要なことから。直接子どもに向き合う教師と学校を支える社会、そのつながりを回復することがどれだけ大切なことか。そのためにも、私たち教師は、目の前の子どもたちに誠実に向き合い、私が小学生の時感じたような「先生の存在のうれしさ」を感じてもらえるよう愚直に実践することだと思う。なりたいと思えるほどの教師の仕事の魅力は、やはり教師によってもたらされるものなのだから。

3 教員であることのやりがいとは何だろう

何と言っても、教師のやりがいは、子どもの育ちにかかわることである。どんなに仕事に追われていても、自分の働きによって、子どもの顔が輝く、子どもの学びが深まるなど、子どもによりよい変化が生まれると、不思議なものでそれまでの疲れが吹き飛ぶ。

前述したように、私は自らの希望で教職に就いた。それは、子どもが好きだからとか、教育の仕事が好きだからといった「好きか嫌いか」の選択ではなかった。子ども心に、「先生」というものがどれほど子どもの心に希望の灯をともしることができるかを身をもって実感し、自分も大人になったらそういう存在になりたいと思ったからだ。それは、そう感じさせてくれた教師への憧れであるとともに、教師という仕事への憧れとなったといえる。

そして、私は教師になった。なってみてわかったことは、当然のことだけれど、教師には技術が必要だということだった。そのころは、指導技術という言い方をされていたが、学校ではその技術を磨くための研修が行われていた。

そうして私は、授業研究に夢中になった。私の心は「よい授業をしたい」という願望で占められ、その高まりとともにそれは「すごい授業をしたい」へと変遷していった。

子どもの心に灯をともし教師という初心を忘れていたわけではない。けれども、「すごい授業をしたい」という思いは、その純粋な心を惑わした。当然、私の関心は、授業の方法論に傾斜し、それは、気がつかないうちに子どもを見つめる目、子どもの思いを聴き寄り添う耳、そしてすべての子どもの小さな変化に心を砕く心遣いを薄くした。

もちろん授業研究のすべてがよくないということではない。教師にとって授業研究は欠くことのできないことである。しかし、授業は子どもの学びと成長のために行うものであり、子どもの事実を大切にしない授業研究は教師の自己満足になる恐れがある。私の場合、そのことに気づかせてくれたのは子どもだった（岩波書店『教師が壁をこえるとき』参照）。

挫折を経てたどり着いたのは「学び合う学び」だった。その転換の時期に佐藤学先生と出会い、子どもの学びをどこまでもみつめ、子どもが育ち合う学校を目指す「学びの共同体」としての学校づくりにすべてをかけていくことになる。それは、今、振り返ると、私にとって必然だったと思う。

話を「教師にとってのやりがい」に戻そう。

教師にとってのやりがいは、子どもへのかかわりでなければならない。授業研究とか授業づくりは、あくまでもそのためのものでなければならない。

教育は子どものためにあるということは当たり前のことである。子どもがよりよく成長することで、社会がよりよくなり、国の未来もよりよくなる、大ぶろしきを広げたような言い方をするが、そう考えるのは当たり前のことである。

学校を取り巻く環境は難しさを増している、教師に対する目は厳しさを増している、教職に対する魅力が薄くなっている、それが現実である。

だからこそ、今、子ども一人ひとりの成長に目を向けた授業づくり、学校づくりを実行しなければならない。一人ひとりの子どものよりよい変化を生み出す営みを、何よりも大切にする、それが「やりがい」になる教師にならなければならない。授業はパフォーマンスではない。地味で愚直で、しっかりと子どもの心に食い込むものでなければならない。そうして、子どもにうれしいうれしい変化や深まりが生まれたとき、それは、子どもにとって喜びとなるだけでなく、教師にとっても、教師であることの喜びとなる。そういう教師像を、そのように実践する教師としてのすがたを子どもたちにも保護者にも、社会の多くの人たちに見てもらえるようにしたい。そして、そういう教師に触れた子どもたちが、次の世代の教師になっていく、それが私の願望である。

4 小学校時代の校長先生とのその後

私が初任者として赴任したのは、小さな漁村の児童数60名にも満たない暫定へき地の小さな学校だった。その学校で5年間、私は、子どもたちとの日々に没頭した。

着任して真っ先に報告に行ったのは、前述した小学校時代の校長先生だった。校長先生は、私が教師になったことをたいそう喜んでくださった。ところが、それからすぐ、先生は病の床に伏せられることとなった。私は帰省した際、お見舞いにかがったのだが、そこで必ず自分の学級の話をした。そういう子どもの話を聴く校長先生が楽しそうにされたからである。

そのうち、私は、子どもたちの作文を収録した文集を持っていくようになった。すると、ある日のお見舞いの際、「これを子どもたちに」と言って、一人ひとりの作文に対して書かれたお手紙をくださったのである。このことをきっかけに、子どもたちと校長先生の手紙でのやりとりが始まった。子どもたちは校長先生のことを「〇〇（地名）のおじいさん」と呼び、親しみを深めていった。そしてそういう子どもたちと「おじいさん」とのかかわりは、修学旅行の際にクライマックスを迎える。というのは、子どもたちの乗った列車が校長先生の町を通過する、そのわずかな停車時間に、病気を押し付けて来てくださった「おじいさん」と感動の対面を果たしたのだった。その二年後、校長先生は亡くられる。私は、子どもたちの「〇〇のおじいさん」との出来事を忘れないようにと、「心の糸をつないで」という記録集を作成したのだった。

お亡くなりになった後、ご家族の方がおっしゃったことに、私はありがたくて涙が出た。それは、「病に伏している間、父は、子どもたちとのやりとりがいきがいになっていました。父が死ぬまで教師でいられたことに感謝しています」という言葉だった。

やはり、私の教職への憧れは、この校長先生によってもたらされたものだった、私は、改めてそう思った。父のいない内向的な私のことを大切にしてくださっただけでなく、教師になってからも、教師としてのあるべき姿を見せてくださった先生こそ、私の憧れだったのだ。

今、教師をしている人たちも、そして私も、次の世代にどういう教師としての姿を見せることができるか、私たちはそう考えないといけない。自分だけのことではない、自分の今は、次の世代にかかわることなのだから。